

# 郷土のヤナギを追って

高校教育研修課 主任指導主事兼高校教育研修課長 橋本 光政

## 要旨

河川にはヤナギの生育地が多い。国内ではヤナギの分類は植物種の中でも難解な部類としてその実態は長く不明のままにされてきた。著者は兵庫県下を広く回り、観察、標本採集することにより植物分類地理学的な詳細を明らかにした。それは環境教育や生物教育への展開にも役立てることができる。そこで、ヤナギを主人公として河川の自然環境を学び、人間との関わりを考えた環境のあり方について考え、環境の保全や創造を実践するための資料となるものにした。

## はじめに

兵庫県下の樹木の中で分類が容易でないとか、分布が判然としないため曖昧なままであった植物群の代表はヤナギ科のヤナギ亜科 Salicoideae、中でもヤナギ属 Salix の植物である。ヤナギ属の植物は花期が早春に開花し始め、結実、種子散布が5月中に終わってしまう。また、同属の多くの種類の生育環境が河川敷とか溜め池や湿地周辺などと、やや不安定ともいえる地に生育し、陽樹であるため森林が安定してくると陰樹にその地を譲りがちである。尚、雌雄異株である上に、花期には本葉が出ていない。また、花期についている前出葉は本葉の出芽と置き換わって落ちてしまう。種の同定には同一個体の花期の状態(標本)や結実期、成葉をつけた状態など、分類の決め手となる時期を変えての丁寧なデータ観察(標本)が必要である。これは他種に比べると相当の手間をかけたデータ収集となる。更に、同定を困難にしてきたもう一つの大きな要因は同属内の種間雑種がしやすい特質を備えていることである。

過去に収集された標本は少なからず残されているが、多くが枝葉だけの標本であり、花期や果期の標本があ

っても、同一個体の時期を変えた成葉を持った標本などが揃えられた標本はなかった。枝葉のみで識別できる種もないではないが、このような性質から、過去の観察や、採集された標本での分類が曖昧な同定のまま放置されていたり、整理されないで今日に至っていた。

筆者自身の今までの観察や採集の方法を振り返ってみても、これではいけないとわかっていながら同一木での後追いの標本づくりの努力を怠っていた。このように過去の標本だけでは同定が困難な上に、同一木であっても高木の日当たりの良い枝葉と日当たりの悪い下枝の葉や徒長枝の葉などは別種かと思われるほど異なっていることもある。

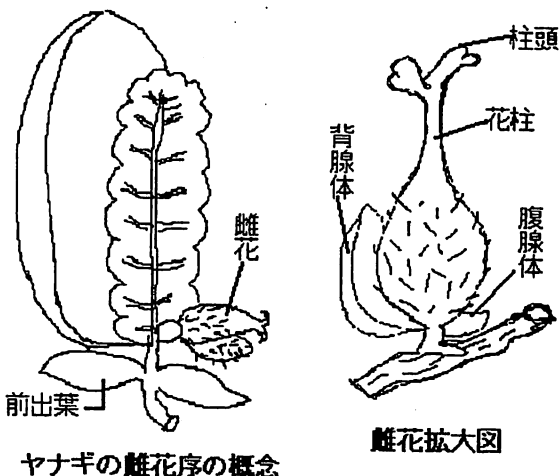
『兵庫県の樹木誌』を作るに当たり、このやっかいなヤナギ属の樹木を同定整理して、兵庫県下の種の存否や分布様式等を明らかにする必要性に迫られた。幸い、県立人と自然の博物館の系統分類研究部に籍を置いていたため、計画的な調査と標本収集が2~3年間に渡って実施することが可能であった。そのため、短期間ではあったが、県下の大きな河川や山地のヤナギについて、同属のみを求めた調査を実施することができた。樹木誌研究会の会員にもヤナギ属の同定のための標本づくりの要点を説いて協力を求めた。開花時、結実時、成葉を持った時期など同一木や同種の時期を変えた標本を備えると、今まで困難に思えた種の同定も比較的理解しやすく、県下での分布や生態等の把握が進むこととなった。

## I 兵庫県下のヤナギ属の分類地理

### 1 ヤナギ属植物の同定のための心がけ五箇条

ヤナギ属植物の同定をし、その分布や生態を把握するため、次のような五つの調査の基本に心がけた。

- (1) 同一木における花期、果期、成葉の観察(同時に証拠標本を作っておく)をすること
- (2) 雌雄異種であるため、雌雄の株に於いて1条の条



兵庫の八大河川とヤナギの分布（表1）

| 河川名                                                                                           | 流域 | アカメヤナギ | ジャヤナギ | カワヤナギ | ネコヤナギ | イヌコリヤナギ | オオタチヤナギ | オノエヤナギ | コゴメヤナギ | タチヤナギ | ヨシノヤナギ |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------|----|--------|-------|-------|-------|---------|---------|--------|--------|-------|--------|
| 千種川                                                                                           | 上流 |        |       |       | **    |         |         | ***    |        |       |        |
|                                                                                               | 中流 |        | *     |       | **    |         | ***     | *      | **     |       |        |
|                                                                                               | 下流 | ***    |       | *     | *     |         | **      |        | *      | *     | * ?    |
| 揖保川                                                                                           | 上流 |        |       |       | **    |         |         | **     |        |       |        |
|                                                                                               | 中流 | **     | *     |       | **    |         | ***     | *      | **     |       |        |
|                                                                                               | 下流 | ***    |       |       | *     |         | *       |        | **     |       |        |
| 夢前川                                                                                           | 上流 | 未調査    |       |       | *     |         |         | *      |        |       |        |
|                                                                                               | 中流 | 未調査    |       |       |       |         |         |        | **     |       |        |
|                                                                                               | 下流 | 未調査    |       |       |       |         | **      |        |        |       |        |
| 市川                                                                                            | 上流 |        |       |       | **    |         |         | *      | *      |       |        |
|                                                                                               | 中流 | *      |       | *     | *     |         | **      | *      | *      |       |        |
|                                                                                               | 下流 | *      |       |       | *     |         | **      |        | **     |       |        |
| 加古川                                                                                           | 上流 |        |       |       | **    |         |         | *      | *      |       | * ?    |
|                                                                                               | 中流 | *      |       | *     | *     | *       | **      |        | ***    | **    |        |
|                                                                                               | 下流 | **     |       |       |       |         | **      |        | ***    |       |        |
| 武庫川                                                                                           | 上流 |        |       |       | **    |         |         | *      | *      |       |        |
|                                                                                               | 中流 | **     | *     | *     | *     |         | *       |        | **     | *     |        |
|                                                                                               | 下流 |        |       |       |       |         | *       |        | *      |       |        |
| 円山川                                                                                           | 上流 |        | *     |       | **    |         |         | **     | *      |       |        |
|                                                                                               | 中流 | *      |       |       | **    |         | **      |        | **     |       |        |
|                                                                                               | 下流 |        |       | *     |       |         | *       |        | ***    | *     |        |
| 岸田川                                                                                           | 上流 |        |       |       | **    |         |         | *      | *      |       |        |
|                                                                                               | 中流 |        |       |       | *     |         | **      |        | **     |       |        |
|                                                                                               | 下流 |        |       |       |       |         | **      |        | **     |       |        |
| 兵庫県下のその他のヤナギ<br>サイコクキツネヤナギ、ヤマネコヤナギ、キヌヤナギ（栽培）、フリソデヤナギ（栽培）<br>コリヤナギ（栽培）、シダレヤナギ（栽培）、ウンリュウヤナギ（栽培） |    |        |       |       |       |         |         |        |        |       |        |

件を満たすこと

- (3) 前出葉と本葉の違いを心得、その入れ替わりを観察（標本にすると区別しがたい時もある）しておくこと
- (4) 花期、果期の花や果実の実体顕微鏡（20～40倍のルーペでもよい）による形態記録を残しておくこと
- (5) 観察木の生育環境を記録しておくこと

県下の詳細な調査結果は後日発表したいと考えるが、今回はまずテーマに沿い、主な河川の上流から下流にかけての分布種とその分布の群集度をまとめ表にしてみた。（表1）

## 2 観察、標本採集をした各河川のヤナギ育成状況

各河川の河口では、岸田川を除いては工場が広がるか、コンクリート護岸工事、その他の施設があり、ヤナギが生育できそうな陸上部が無くなって一面に水面が広がっている。ただし、各河川とも河口から300m～1km入った付近には広くはなくても河原が存在したり、川岸に生育陸地が残されていてヤナギの自生が見られるようになる。

## 3 大木の残っている河川

武庫川は河口から長い距離に渡ってコンクリート護

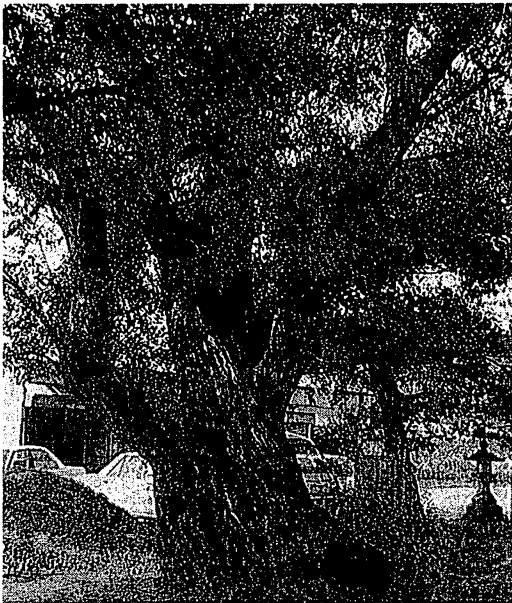
岸がもうけられ、河川の幅全面に常時水が満ちている。しかし、河口から1～2km入ると、河川敷の公園化が進み、河川岸には数は少ないがコゴメヤナギの大木が残されている。その公園は全面皆抜の跡に施設されたものと考えていたが、古木に配慮した思わぬ意外な工法であったと喜んだ次第である。

自然の河川岸や河川敷に大木の残っている例では千種川下流（字中山）のアカメヤナギの大木が挙げられる。大木の周辺には畑地化した部分もあり、長年に渡っての陸地状態（河川敷）の結果であろう。ただし大洪水の時は畑地化された区域も流水で覆われてしまうと思われる。

円山川は日本一流れの緩やかな河川として有名であるが、昔の氾濫原であろうか（未調査）、河川林や畑地が広範囲に存在している。その中にアカメヤナギの大木が残存している。また、江原の円山川支流の分枝点にはコゴメヤナギの大木が3本残されている。

以上特筆したヤナギの大木は浜坂のアカメヤナギのように県指定の郷土記念物や、市川中流の大河内町指定の天然記念物のように、今後も永久に残すという保

証を持った指定木としたいものである。前者は現在神社の広場の片隅に生存しているが、その生育地は元の河川跡であった。これなどは、現在でこそ周辺に水田が広がり根への水分供給が確保されているが、将来各種の開発が進めばその限りではなかろう。そのときはこのアカメヤナギが元の河川の生き証人として大きな意味を持つことになるが、それは同時にヤナギ自身の生存の危機を表すものである。環境への人間の保全・創造活動が生かされるときであろう。



浜坂町のアカメヤナギ（県郷土記念物）

#### 4 やや広くヤナギ群落の残っている河川

次に単木としての残存でなく、群落として見事な河川林を作っている箇所を挙げてみたい。

その1は、千種川の高雄の河川敷に発達している群落である。県立人と自然の博物館にはその超広角レンズでとらえた生態写真が展示されている。構成種はオオタチヤナギ（ほとんどが雌株）とアカメヤナギ（雌雄株が混生）の亜高木が主体で、稀にネコヤナギの低木が水際に分布している。林相としての保存対象の一つである。その群落の歴史は浜坂などの大木に比べると、そう古いものではなく河川工事の工事記録から1928年以降に生じた群落と思われる。

武庫川の仁川との合流点は円山川や千種川などと同様一部が畑地化されて利用されているが、種類数においては兵庫県下第一位である。コゴメヤナギの亜高木、タチヤナギ、カワヤナギ、ジャヤナギ、栽培種の逸出ではあるがシダレヤナギ等が混生している。

円山川には、豊岡市来日の河岸や中州のヤナギ群落、少し上流に遡っていくと日高町、八鹿町、養父町の藪崎や養父市場までの広範囲に渡ってヤナギ群落が発達している。まさにヤナギの宝庫、ヤナギ天国ともいえる状態を誇っている。河川の傾斜の緩やかさゆえの生

態であろうか。

また、河川流域の広い加古川では、下流から上流まで海拔高度の低い河川敷が斑点状に続いている。ヤナギの群生はそれを反映して各地に見られる。加古川市内の河岸や中州等には古木はないが亜高木にまで生長した群生地が多い。春から初夏にかけてはその新緑の美しさが地元の人たちにも注目されている。河川管理上では各種の問題はあると思うが、ヤナギとの共存策を考えた管理運営の望まれる群落である。主な構成種はアカメヤナギ、コゴメヤナギ、オオタチヤナギである。各群生地の構成種は表1に見るとおり少しずつ変化が見られる。

#### 5 種による群落分布の特徴

ネコヤナギは上流に多く、特に河川の岩の周辺とか、荒い石ころの多い地に群生している。清流域に縁の深いヤナギといえる。オノエヤナギは深山等に多いが河川にも時々見られ、ほぼ上流部のみである。オオタチヤナギ、ジャヤナギ、コゴメヤナギ、アカメヤナギ、等の中流域から下流域に多い。タチヤナギは一部の河川のほぼ中流域から下流域に見られる。



千種川上流のネコヤナギ群

#### 6 開花時期の特長

分類群の中ではアカメヤナギだけが春の芽吹きが最も遅く、他のヤナギが開花している時期にはほとんどの株が細い枝ばかりで、周辺の落葉樹などの枝と混生して、その存在すら見落としがちである。したがって、花期を求めての調査も10日から2週間をずらした調査が必要である。逆に言えば、他のヤナギはほとんど一斉に開花結実するのである。当然各種ヤナギ間の花粉の授受が起こり雑種の生ずるチャンスが多いこととなっている。ただ、山地のヤナギ（ヤマヤナギ、ヤマネコヤナギ、オノエヤナギ、サイコクキツネヤナギなど）は海拔高度により気温の上昇に伴い開花するため、山頂部へ行くにしたがって開花結実が遅れていく。

#### II ヤナギ群落の観察と環境教育へのアプローチ

環境教育の目的をベオグラード憲章(1975年)は「環

境とそれに関わる問題に気づき、関心を持つとともに、当面する問題の解決や新しい問題の発生を未然に防止するため、個人及び集団として、必要な知識、技術、意欲、実行力などを身につけ、責任のある行動のとれる世界の人々を育てることにある。」と定義してきた。これを受けて文部省、中教審も身近な環境から始めて、人間とのかかわりについて理解を深め、環境の保全や創造を实践する態度に言及してきた。

今回テーマとしたヤナギやその生育地、特に河川は、身近な自然環境であり、多くの人間との関わりを包含し、人間としてなすべき保全や創造を身につける適地である。

ヤナギの群生が河川環境に大きな影響を持っていることは、一般にはマイナスの効果として表現されることが多い。河川管理上は水の流路妨害者として嫌われるのである。そのため、河川改修時にはほとんどの場合が伐採されて、河川敷は砂利や岩肌がまる出しにされてしまう。ところが、ヤナギは河川の美化や水の浄化に大きく貢献し、多くの生物界の住みかづくりに大きな役割を担っているのである。

#### (1) 展開例を考えるに当たって

体験は人を作る。幼児体験、物心がついてからの日常体験、段階を追っての読書体験、年齢に応じた思考・判断・決断の体験と家庭が、地域が、学校が子供たちに心がけてやることの必要性が多様になってきている。

最近、筆者が考え実践してきた体験を、佐島群已著『環境マインドを育てる環境教育』に見つけることができた。その佐島(1997)は独自の人類文化史的発想に立った体験学習を展開し、それぞれの子供の発達特性に応じた“感性を磨く価値ある体験”の必要性を説いている。例えば、九才から十歳にかけては「生き物を飼い、必要に応じて生き物を殺す」「寒冷をがまんする」「集めたり、つくったり、とったりしたものを調理して食べる」ことなどをあげている。

#### (2) 実施に当たってのポイント

家庭、地域、学校とそのおかれた条件に応じて計画されることが好ましいが、学校を中心にした計画には次のようなポイントを考慮しつつ実施することが大切である。

- ①児童、生徒の実態を踏まえ、環境教育の目標を認識させつつ、ゆとりを持った展開を図る。
- ②実施方法は教科活動、ホームルーム活動、学校行事、部活動、登下校時、PTA活動、地域との連携活動、異校種間との連携活動、各種団体やボランティア組織との共同活動など取り組みやすい方法から始める。
- ③豊かな四季に応じて活動内容に変化を持たせ、体験を通じた感動を生むプログラミングが望ましい。
- ④人と自然のかかわりに無理のない考えや行動を基本



水棲昆虫調査風景

としたい。

#### (3) 河川のヤナギから得て欲しいもの

体験活動には野外観察、バードウォッチング、家族やグループハイキング、子供会活動、遠足、清掃活動、草刈り実習、魚釣り大会、ドジョウすくい大会、山菜摘み、ネイチャーゲーム、リサイクル資源探し、環境マップ作り、子供や老人へのボランティア活動、水質検査会、動植物調査会、公害調査や交通調査、その他各種の巡検活動、条件が整えば水遊びや水泳大会、今はできなくても何年後を見込んだ創作活動等々、実施とともにさらに意欲的な感動体験のできる活動は浮かんでくるであろう。直接ヤナギや河川の観察・調査などでなくてもその活動の中で河川に最も目立つ樹木であるヤナギ群落に目を向け、前半で明らかにした事実の他、感受して欲しい要点を季節を追っていくつかあげてみよう。

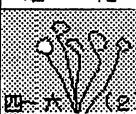
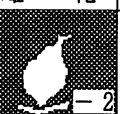
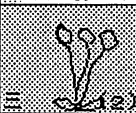
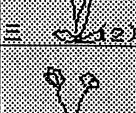
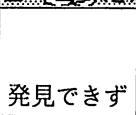
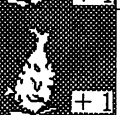
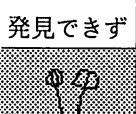
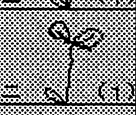
##### ① ヤナギ群生地での春の観察

ヤナギは高等植物の中では珍しいといえる雌雄異体(雌雄異株)の樹木である。生物の性は生物らしさを特徴づける最も大きな要素である。高等動物では雌雄異体が普通であるが、植物では雌雄同体(雌雄同株)が一般的である。

ヤナギは生物教育においてもあまり教材化された例を知らない。種の同定が難しいこと、生育地が河川周辺とか、湿地周辺などと限られた例が多く、教育現場としての煩わしさが教材としての機会を妨害したものと思われる。ただ、知る者のみが再生や、極性の実験材料として利用してきたにすぎない。

春の河川敷においてヤナギの花期の観察をさせたい。雄花、雌花をつけた個体の樹形や、花の観察(開花直前はいわゆるネコである)、枝振りや、樹皮の違いなど生物の種としての特徴をつかませると同時に、その株下の環境観察をさせる。そこにはあらゆる生物の息

# 兵庫県下のヤナギ同定の目安

| 亜 属    | 節      | 種       | 色                                                                                         | 雄 花                                                                                          | 雌 花                                                                                        | 生育型 | 葉の特徴                                                                                | そ の 他 |
|--------|--------|---------|-------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| マルバヤナギ | マルバヤナギ | マルバヤナギ  | <br>淡黄緑色 | <br>四雄花 (2) | <br>雌花 -2 | 中高木 |  |       |
| ヤ ナ ギ  | シダレヤナギ | タチヤナギ   | <br>淡黄緑色 | <br>三雄花 (2) | <br>雌花 -1 | 中低木 |  |       |
| ヤ ナ ギ  | シダレヤナギ | コゴメヤナギ  | <br>淡黄緑色 | <br>三雄花 (2) | <br>雌花 +1 | 中高木 |  |       |
| ヤ ナ ギ  | シダレヤナギ | ジャヤナギ   | <br>淡黄緑色 | 発見できず                                                                                        | <br>雌花 +1 | 中高木 |  |       |
| ヤ ナ ギ  | キヌヤナギ  | オノエヤナギ  | <br>上部黒色 | <br>二雄花 (1) | <br>雌花 +1 | 中高木 |  |       |
| ヤ ナ ギ  | コリヤナギ  | イヌコリヤナギ | <br>上部黒色 | <br>二雄花 (1) | <br>雌花 -1 | 低 木 |  |       |
| ヤ ナ ギ  | コリヤナギ  | カワヤナギ   | <br>上部黒色 | <br>二雄花 (1) | <br>雌花 -1 | 中低木 |  |       |
| ヤ ナ ギ  | ネコヤナギ  | ネコヤナギ   | <br>上部黒色 | <br>二雄花 (1) | <br>雌花 -1 | 低 木 |  |       |

吹が芽生え始めている。ただ、ヤナギの花序の下に付随している葉のような前出葉はこの時期だけのもので、やがて落ちてその後本葉が出芽してくる。花の形態は、雌雄ともにルーペで観察しその形態をそれぞれスケッチし、証拠標本も残すことが科学的思考の発端となる。

## ② 春のヤナギ群生地の果実期の観察

中国渡来の柳絮（りゅうじょ）の話は知る者が多い。（最近の中国ではシナヤマナラシともいえるpopulusの街路樹から飛散する柳絮が毎春の話題として登場してくる。）ヤナギは陽樹であって、樹林などの破壊された裸地に最初に入り込んで樹林を形成する。大きな洪水が起こる度に不安定な山地や河川敷に裸地化が起こり、その後にヤナギ群落ができやすい。一つの環境破壊のバロメーターと読むこともできる。

春のヤナギ観察をした場所で、同じ個体に注目しながらその果実の実りや破裂（柳絮が飛散する）の様子を観察させる。

観察を通じ、日本ではヤナギ以外の緑地が多く、また中国と比較して大気湿度が高いことなどから柳絮が公害として問題視されない実状なども理解させることができる。

## ③ ヤナギ群生地の夏の観察

夏には本葉を出し切ったヤナギの緑が河川に様々な影響をもたらしている。花期や果期の観察と同じ場所

で、同じ個体に注目してみる。今までは簡単に株下に足を踏み入れることができた場所も、草本植物の繁茂がすさまじく季節の進展とともに環境変化の著しさを知る事となる。

そこは、すでに数多くの生物の住みかとなり、小さな生態系の維持がなされていることが理解できる。人の目から見るとやや危険を感じさせるハ虫類（マムシ他）、両生類、魚類、昆虫類などが生息し、ヒトとの共存に必要な多くの条件が整った場所となっている。



柳絮（りゅうじょ）の顕微鏡写真（アカメヤナギの種子）

地球の管理者となったヒトはこの条件の維持に貢献することが望ましく、各種の手段を用いてその建設的な保全策を講ずることの必要性を体得させたいものである。

④ 河川のゴミ観察から人工ゴミの処理対策を考える  
季節を変えたヤナギ観察をする度に人工ゴミ（プラスチックやビニール系）の処理に再考が必要なことを理解することができるであろう（晩秋から早春が良く目立つ）。自然ゴミと人工ゴミの違いは、多くの場合、前者が微生物の働きを受け自然消滅するのに、後者が長くゴミとなって自然界に戻るのできないまま残存することである。



洪水時にヤナギにかかったごみの各種

生活環境に対する美的感覚は人間すべてがもっている。この身近な河川環境を、自然や歴史的環境の視点から見直すことにより、より良い生活環境や倫理観を養うことが期待できる。

環境問題の原点はヒトを頂点としたあらゆる生物種の存続にあることを理解するため、生物ピラミッドの底辺から頂点までの生息域の観察と理解が必要である。ヒトの健全な生存を最優先することは良しとして、そのためには底辺を支える生物の生息条件を残すなり、整備することの必要性を悟らせたい。

### Ⅲ ヤナギに関してより広く、より深く知るために

雑多にヤナギの登場する書物からいくつかを拾ってみた。同類の書物も沢山あり、見てない書物のほうが多いと思うが、また解釈の違いや用法の違い等々様々な相違はあろうがヤナギの理解に各所からの取り組みがあることを示してみたい。

資1 兵庫県史編集専門委員会『兵庫県史第1巻』1974の序説「産業の地域性」の中で、但馬の産業として見落とすことのできないものは、豊岡盆地の低湿地にできる杞柳を使った柳行李の生産と村岡を中心とする但馬牛の飼育である。とあり、『5巻』（1980）には「但馬・丹波諸藩の専売制」の中で豊岡市を中心とした円山川流域では、コリヤナギを原料とした柳行李（近世では骨柳）の生産があった。すでに宝暦11年（1761）に大阪に骨柳問屋をおいて、但馬生産地との流通を整

備していたが、その後19世紀に入ると、かなりの生産が見られるようになった。中略。豊岡藩も財政窮乏の中でやなぎ行李流通の独占をはかり、文政5年に八鹿油屋幸右衛門、九日上ノ町（豊岡市）坪屋源右衛門を地元の骨柳問屋として骨柳師・仲買をすべてそのもとに従属させ、翌年には新設された産物会所に問屋機能を吸収させたとある。

資2 柳行李の産地豊岡には柳にまつわる“柳まつり”があり、そのテーマ曲の一つ豊岡音頭の歌詞には柳が何回も歌われている。（長田幹彦作詞、山川武作曲）1. ハァ但馬豊岡ヨイトナ 土産は行李ヤットセ つめてやりたや色小袖 ヤットセソレナ 2. ハァ柳まつりぢョイトナ 囃せよ太鼓ヤットセ 神も渡るよ夜の水 ヤットセソレナ 3. ハァお国名物ヨイトナ 柳の細工ヤットセ 踊るあの子もやなぎ腰 ヤットセソレナ 4. ハァ但馬自慢よヨイトナ 夫婦のかみヤットセ 柳手編みの共稼ぎ ヤットセソレナ

資3 神戸新聞社編『兵庫探検：民俗編』神戸新聞社1976：兵庫県下の民俗についての本は各種あるが、実に得難い貴重な資料である。中に、コトノハシの写真があり、「コトノハシとは」として、コトには寄り合いゴト、二番ゴトなどといって隣保や部落の人全員が集まって行なう「村ゴト」と一軒ゴト、総ゴト、一番ゴトと呼ばれる各人の家で行なわれる「家ゴト」の二種あり、いずれの日にもあんもちや、きなこもちを作り、ヌルデや柳、クリといった木で作った粗雑なハシをワラで編み、ワラジ、キネ、ふさなどとともに、木（カキの木が多い）にぶらさげることになっているとある。

資4 堀治三朗『神戸層群産植物化石』日本地学会館1976：県下の第三紀植物化石群を神戸層群と呼び著者は179種を識別したが、未検討種も含めると200～230種はあろうとしている。中にヤナギ属（*Salix*）2種が記録され、*Salix varians*とエゾキヌヤナギに似た*Salix*を挙げている。

資5 日本語辞典にも各種あるが、手元にあった新村出編『広辞苑』岩波書店1976：の中のヤナギに関する諺を拾ってみた。「ヤナギに雪折れ無し」、「ヤナギは緑花は紅」、「ヤナギに風と受け流す」、「ヤナギに蹴鞠（ケマリ）」、「ヤナギの下にいつも泥鰌は居らぬ」、「ヤナギを折る」と数多くある。

資6 開田斎『丹波・但馬自然教室：山・川・草・木』丸善1984：かつて佐治川やその上支流の遠阪川の両岸はカワヤナギ（ネコヤナギ）の見事な群生が延々と連なっていた。春、四月の雪代水も夏の増水期にも、佐治川の水はこのヤナギの枝々をふるわせながら流れた。半ば水に浸った、濃い緑の葉、流れに逆らって、

時々反転して、しなやかにはねかえる小枝、その葉裏は粉をふいたように白くて、はっとするような鮮やかな、緑と白の調和した動きをリズムカルにくり返していた。中略・・・しかし今は、探し求めて、やっと堤のあちこちに、みすばらしい一株、二株を発見するにとどまる。

昭和三十年代頃だろうか、衛生運動、環境衛生運動がこの地方にも声たかく叫ばれ、蚊、ハエの絶滅を期して、墓場の花筒こわしから始まって、雑草の刈り取り、藪の竹の切り株の水たまりをなくすためと称して竹の切り株も、ていねいに割られた。はては川の両岸に群生するカワヤナギも、蚊のかくれ場所になると、切り払われた。それらはそれなりの社会的貢献をしたことは否定できないけれど少し小児病的でもあった。さらに年代が下がっての河川改修で両岸は、局部的にはあるけれど次々とコンクリートブロックに改められカワヤナギや榎木なども多数に切りとられた。以下略。大変貴重な風物史である。

【資7】 中西哲・大場達之・武田義明・服部保『日本の植生図鑑<1>』保育社1986：本著は日本の森林植生を解説した図鑑である。この中でヤナギについての記述は一個所あり、ブナ・ミズナラ林の植生のその他の一つとして、ヤナギ・ヤマハンノキ林（河辺林）を挙げている。広い河床がある河川の岸や中州などの、氾濫時や増水時などに水に浸かるような立地には、ヤナギ類やヤマハンノキを主体とした河辺林（オノエヤナギラス）が発達している。更に、本州中部から北の、日本海側の山地ではシロヤナギ群落、ドロノキ・オオバヤナギ群落が存在するとしている。

【資8】 明石公園百年史編集委員会『明石公園百年史』兵庫県1987：杉田隆三先生担当の樹林と樹木があり、観光ハウスの東方にヤマモモの巨樹があり、それより少し北の谷間にアカメヤナギの大木がある。とあり、生育状況が極めて悪いとある。筆者はこの大木の他に池の端で大木を確認し『兵庫県の樹木誌』にその樹皮の写真を載せている。

【資9】 『角川日本地名大辞典 28兵庫県』角川書店1988：柳、柳村、柳町、柳原等々柳のつく地名が載せられているが、大方はその地が川淵などの柳の生育していたことによるとある。金井弘夫著『日本地名大辞典』は国土地理院発行の2万5千分の一の地形図にある地名をすべて拾って整理されたものである。その、県下の読みの正誤は筆者が担当し各地の先輩諸氏をたずねて整理した。それによると、県下に柳のつく地名が25箇所ある。

【資10】 渡邊定元監修『但馬の巨木100選』兵庫県林業会議1994：第45回全国植樹祭を但馬で迎えることを

記念に但馬の森に親しむ但馬人が、何か森について考えるようなものはないかと協議して造ることになったという。写真は5人のカメラマンの労作で、解説は県立試験場研究部長の古池末之氏である。100選の中に1点ヤナギがあり、浜坂町福富三柱神社のアカメヤナギが載せられている。この大木は兵庫県の郷土記念物に指定されている。

【資11】 兵庫県教育委員会社会教育文化財課『兵庫県の民俗芸能』兵庫県1996：県下の多くの伝承が詳しく調査され記載された名著である。その伝承の中で、柳が登場する二伝承のさわりを記しておく。姫路市書写山田教寺の修正会 芸態の解説の中、前後略・・・本堂の溜部屋で二人の鬼役が鬼係の協力を得て赤鬼・青鬼の装束を着終えるころ、中略・・・舞堂ではまず鬼係によって鬼箒が参拝者に撒かれる。鬼が舞堂にあがるとその傍らで焚かれている火を松明に移し、赤鬼に渡すと赤鬼を先頭に青鬼がつづいて登場する。鬼係は舞堂の入口近くで柳の木の杖で床を叩いて拍子をとる。赤鬼は鬼係の杖で床を叩く音を合図に合わせて、松明をさげた状態で二歩進み、右脇腹に鈴を構えて鳴らす。中略・・・鬼追いが始まる。とある。

波賀町原八幡神社のチャンチャコ踊りの 歌詞や唱え言葉に「おちご踊り」の例が挙げられ、おちごを寺いのぼせておいて おちごはお京い 追はせます おちごを抱いて 寝た夜はさまよ お船三石 おしからず おしからず 播磨の書写寺の おちごの かたびらの かたにはなびけの しんだれ柳の 腰にはなびけの とぶところ とぶところ おんじゃれの おんじゃれの 以下略。がある。

【資12】 石川茂男『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂男図鑑刊行委員会1994：多くの種類のヤナギがあるが、掲載されているのはアカメヤナギ、ミヤマヤナギ、タチヤナギのわずか3種である。おそらく同定に困難をきたしたためと思われる。

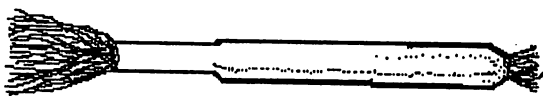
【資13】 山田卓三・中島信太郎『万葉植物事典』北隆館1995、松田修『万葉の花』芸艸堂1989：楊と柳について前著はヤナギは古歌にもよく詠まれ、『万葉集』には四〇首（後著は四十一種）あるといわれ、その解説されている一首に「浅緑染めかけたりと見るまでに春の楊は萌えにけるかも」とある。即ち、楊で解釈されているが、松田修氏は柳を用いられ万葉集のヤナギは全て柳でカワヤナギが楊とされている。つまり、松田氏は枝が垂下がるしだれヤナギが柳で、枝が立つヤナギはカワヤナギと詠まれ楊とされている。

【資14】 渡辺弘之『樹木はぐくんだ食文化』研成社1996：箸を使っているのはモンゴル、中国、ベトナム、日本などアジア大陸の東北部に限られている。これは

粘りのある米を食べることと、関係しているといわれる。として、箸にもいろいろある。神社・仏閣の長寿祈願の授与箸、長い長寿箸、茶時の箸、そして家庭で日常使う箸、食堂・レストランで出てくる箸などだ。ハレの日の箸は中太両細の両口箸で、両方から食べることができる。普通、丸い白木の柳箸であるが、これは長さ八寸と決まっており、一回で捨てるのがしきたりのはずだ。家庭で使っている箸は、片口の塗り箸である。漆塗りのものが多いが、塗っていない黒檀やボルネオテツボク（鉄木）の箸もある。……ナンテンでつくった「南天箸」には中風よけの効果があるとされ、よくお寺などで売られている。庭のナンテンを見てみると高さはせいぜい背丈まで、太さも親指大で終わり、これでお箸を作るのは大変だと思っていた。ところが実際には南天箸といわれるものは、イイギリで作っているのだそうだ。……（注：イイギリは赤い果実を多く垂れ下げるのでナンテンギリともいわれる。）

**資15** 渡辺定元『樹木社会学』東大出版会1996：個々の種は、種ごとの定まった特性があり、異種・異齢の種個体群の出会いによって群落の表現型である相観は異なり、森林の繊維をひじょうに多岐にしている。温帯、北方林帯、亜高山樹種についての遷移特性は、下記のとおり4類型化できるとして。①陽樹－先駆種 カラマツ、アカマツ、ドロノキ、ヤナギ類、シラカンバ、コバノヤマハシノキ、ヤシャブシ、オオバヤシャブシ、ミズキなどを例示し、以下②陰樹－極相種、③陽樹－先駆種・極相種に気候的極相形成種と土地的極相形成種、④陰樹－先駆種・極相種の例を挙げている。

**資16** ドイツー日本研究所『シーボルト父子のみた日本』便利堂1996：展示資料番号197,198房楊枝Zahnbuste（オランダ、ライデン国立民族博物館所蔵）医師であったシーボルトは漢方医療や鍼灸など日本の伝統的な医療器具・薬品類も収集し、按摩器・孫の手・耳かき・房（総）楊枝などの衛生・健康管理具も対象とした。房楊枝は打楊枝ともいう。ヤナギの小枝の一端を叩き砕いて房状にしたもので、歯ブラシの用に供した。興味深いことに、彼は同仕様の房楊枝を多数集めていたとある。筆者は特別展でこのヤナギ楊枝を見たとき、シーボルトの偉大さとともに日本人の知恵の偉大さにも感心したものである。ヤナギの木の性質を



シーボルトが収集した房楊枝のスケッチ（橋本）

良く知ったが上の材料である。寸法は20.5x2.0と21,0x4,2cmで写真もある。

**資17** 大岡信監修『日本うたことば表現辞典（植物編）』遊子館1997：古歌の代表に『古今集』の「見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける」、『新古今集』の「道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ」を拾い上げておこう。そして、古歌に続いて有名な現代詩も挙げてみると、「猫柳春の暗示のそことなくをどる川辺を泣きてもとほる」北原白秋、「三千里わが恋人のかたわらに柳の絮の散る日にきたる」与謝野晶子、「田一枚植て立去る柳かな」芭蕉、「昼の夢ひとり楽しむ柳かな」千代女、「雪だけの中にしだるる柳かな」芥川竜之介などがある。

続いて、兵庫県の植物研究史において、其の著書や論文にヤナギが登場する文章を年代を追って順に抜粋してみる。

**史1** 樋口繁一 多紀郡天然記念物候補地に就いて「兵庫県博物誌」16号1938：篠山町日置に六本柳と称される大きな Salix が2本（元は6本あった）あるが、山鳥吉五郎氏、牧野富太郎博士の確認後、牧野先生も「こんな大きなヤナギは初めてだ」と申されたと書かれている。筆者（橋本）はもちろんこの六本柳の古木は見たことがない。故樋口繁一氏のご子息で当時的高校研究会生物部会長の樋口清一氏によると、その後残っていた2本も枯れ、最後の一本は昭和60年代のはじめに枯死したという。その名所には古木の枯死とともに其の跡に補植が実施され、最も古いものは近世（明治?）という。平成7年の清一氏の測定では目通り太さ1.5mあったという。1953年に木村有香博士の同定でヨシノヤナギとわかるが、この1938年当時は花が観察されて居らず、コゴメヤナギと推定されている。

**史2** 樋口繁一『丹波の生物』1953：篠山新聞に30回以上に渡って投稿されたものを整理してまとめたという。堀勝、田代善太郎、牧野富太郎、小泉源一博士などの指導を受けた成果である。その中に“篠山町日置に六本柳という大木が残っている”とある。また、田代、牧野、木村有香氏等も夏の葉だけではコゴメヤナギであろうとしか推定できないとされていたこと、最終的には1953年樋口繁一氏が花の咲いた標本を木村氏の研究室に送られ、ヨシノヤナギと決着していたことがわかった。筆者は1993年の夏、樋口清一氏の案内で古木六本柳の枯死後に補植されたというヤナギを初めて知った。その際、小枝の標本を採集していた。花も実もなくコゴメヤナギかなと思い、花期の標本を採集してから同定しようと考えていた。ところが、この『丹波の生物』の解説を読んだのはその後の『兵庫県

の樹木誌』の著作中であった。県立人と自然の博物館には著者が1993年採集した枝葉のみの標本を納めているが、もっと早くこの記事を求めて花の標本を採集しておくべきだったと反省したしだいである。その後、1995年の花期に、樋口清一先生に頼んで花の標本を届けていただいた。その標本は雄花をつけており、雌株は残されていないことがわかった。名前の起こりである古木6本の中にはたして雌株があったのかは不明である。ヨシノヤナギと同定された標本は京都大学、東京大学、科学博物館にも標本は見当たらない。その標本が木村有香博士最終の勤務地東北大学に残されているか、今だ調べたものはいない。機会を作って調べたいものである。現在六本柳に植えられているものはその子孫であるといわれるが、その事実を明らかにしたいものである。

**史3** 兵庫県生物学会編『兵庫県生物誌』神戸新聞社1956：中に「六甲連山の植物」とあり、頂上北面にブナ、イヌブナがあり、有馬川上流にはヤマグルマ、水無川にはヨシノヤナギの大木が茂っている）とある。（林中元他）以下略。

**史4** 木村正司『明石公園木本植物誌』大成塾1960：乙女池の東側山地には・・・中略・・・ムクノキ、アカメヤナギ、サイカチ、タブノキ、ラクウショウ（栽）の大木の生育も挙げている。

**史5** 山田実 妙高山の樹木十二月「ひかみ3号」1961：比較的分布が少なく興味深いものにはイヌコリヤナギ、コブシ、ミツデカエデ、ヒカゲツツジ、オオウラジロノキ、イヌブナ、カジカエデ、ホツツジなどがある。

**史6** 細見末男 粟鹿峰の草と木「ひかみ7号」1963：粟鹿峰頂上には郡内では他にみられないものとして、コハクウンボク、中略・・・ダイセンヤナギ（現在はヤマヤナギと区別しない）の存在を解説している。

**史7** 室井緯『六甲の自然』六月社1964：六甲山系の自然に関し、古くから携わってきた博物学会会員、生物学会会員の著による普及書である。珍植物の分布について（川崎、室井）の中で、ミヤマヤナギとあるがヤマヤナギであろう。以下略。

**史8** 植物班調査報告『県政百年記念 兵庫県縦断踏破学術調査報告』三木茂氏指導 武庫川女子大学1967：氷ノ山のキャラボクが貴重であることなどを述べている。しかし、目録のミヤマヤナギ、ミネカエデ、ミヤマクマヤナギ、クロウスゴは同定間違いと思われる。

**史9** 細見末男 佐治川植物目録「ひかみ8号」1967：250種の草木を列記し、樹木の分布的に注目するものにヒトツバハギ、ヨシノヤナギがある。

**史10** 藤原健司 川辺の植物群落「ひかみ8号」1967：木本ではネコヤナギ群落のあること、コリヤナギ群落もあるが植栽であろうなど書いている。

**史11** 芦田伸治 コリヤナギ「ひかみ8号」1967：明治初年に豊岡から持ち帰ったと言う。稲畑に「ふけ」という湿田地域があり、多いときはその栽培面積が40町歩にまで広がり、茎を刺してから3年、7～8年以内が最も良いものが収穫できるという。

**史12** 建部恵潤 兵庫県宍粟郡及び近接地植物分布資料「兵庫生物：Vol. 6 No. 2」1970：播磨植物目録以降の重要なものに就いて記録するとして、樹木では・・・中略・・・ダイセンヤナギ（ヤマヤナギ：三室山）、イワナシ（音水）・・・中略・・・が記録されている。

**史13** 紅谷進二編『兵庫県植物目録』六月社1971：兵庫県生物学会の先験的な会員が収集したり観察したりした総決算として出版された。実質的に学会のリーダーであり、後の会長の室井緯博士が紅谷進二会長の時代に会員に呼びかけてまとめられたものである。筆者もお手伝いをしたが、まだ県下の植物には精通できておらず、特にヤナギにおいてはほとんど無知であったため、意見を挟む予知はなかった。しかし、今その登載種を見てみるとかなりおおざっぱであったことがわかる。27種と1変種が載せられているのである。最近の筆者の知見は『兵庫県の樹木誌』に載せたとおり自生種は16種である。

**史14** 内海功一 船越山の植物概説（ガリ刷り）1971：種子植物で713種が自生しているとし、特色ある植物にヨコグラノキ、ミヤマトベラ、ナツアサドリ、チトセカズラ、パッコヤナギ、ユクノキ、アサダ、ケバイカウツギが挙げられている。

**史15** 倉田悟『原色日本林業図鑑第1～5巻』1964～1976：各巻ごとに問題となる種を拾い上げてみた。ヤナギについては第1巻（改訂版：1971）に登載された100種の中にオオバヤナギがある。筆者は『兵庫県の樹木誌』には県の中央部に分布点があるがもう少し北に分布するものであり、県下では見たこともなくおそらく同定間違いであろうと推察するとしたが、1997年国立科学博物館の標本調査をした結果、オオバヤナギと確認した。採集地は播磨小野町とあり、採集者松島克生、科博標本no.37290、その他データ無しの標本である。

**史16** 細見末雄 但馬地方植物報告（Ⅰ）、（Ⅱ）、（Ⅲ）、（Ⅳ）[兵庫生物Vol. 7 No. 2～5] 1976～9：淡路、東播に続いて但馬の新知見の報告である。兵庫県植物目録に記録されていないもの98種が挙げられ、ヤナギではサイコクキツネヤナギ、パッコヤナギ、ネコヤナギ、キヌヤナギ、コリヤナギとある。

**史17** 室井綽 兵庫県生物年表 1, 2「姫路学院女子短期大学紀要」1982: 生物の変遷を追うに当たってたいへん参考となる。例えば、赤穂市千種川下流の高雄には現在多くのヤナギの大木が群生しているが、1928年には神戸市の国鉄を高架にするため砂礫を採ったとある。従って、現在のヤナギの年齢は古いもので60数年生であることが類推できる。

**史18** 村田源 近畿植物誌 (1~30)「兵庫生物 Vol. 2 No. 4, 5 (1954) ~ Vol. 9 No. 4 (1986)」: 京都大学の標本に基づいて、1705種が記録されている。その内、兵庫の木本についてのみ注目し、兵庫県下に分布するが、近畿植物誌にないものを種単位で書き上げてみると次のようになる。中略・・イケノヤナギ (雑種)、キヌヤナギ (栽培逸)。逆に、『兵庫県の樹木誌』に記録しなかったが、近畿植物誌に記録されている種以下の和名を拾い上げてみると、中略・・ヒロオヤナギ (雑種)、ミヤコヤナギ (雑種)、コンゴウバッコヤナギ (雑種)、ヤマトヤナギ (雑種) がある。また、オオキツネヤナギは (1980年採集、氷ノ山産の枝葉のみの標本であるが) 筆者が京都大学の標本を調べたところヤマネコヤナギと考えた。

**史19** 細見末雄編『三丹植物方言集稿』自費出版 1986: 但馬・丹波・丹後の方言を収集整理したもので、貴重な業績である。今回はネコヤナギの方言だけを拾ってみる。アオヤナギ、エノコヤナギ、カワヤナギ、ネコヤナギとある。

**史20** 長谷川義人 (ヤナギ科) 神奈川県植物調査会編『神奈川県植物誌』1988: ヤナギの同定の際、図と解説を参考とした。広く詳細に調査されていることがよくわかる。

**史21** 東正雄『宝塚の植物 I ~ IV』宝塚市教育委員会 1986~1988: IVが木本類で、各植物の解剖図を含めた細密画のつけられた貴重な普及書である。証拠標本がないのでその価値が半減してしまうが、県東南部として分布的に興味深いヤナギを拾ってみるとイヌコリヤナギ (香合新田、武庫川川原)、ヨシノヤナギ (コゴメヤナギに似るが子房や果実に毛が密生するとある) がある。

**史22** 奥山春季『原色日本野外植物図譜 1 ~ 3』誠文堂新光社 1987: シダ植物、種子植物の生体写真とその解説及び分布図が収められた大著である。分布図は全国レベルで作られている。その中で、兵庫に分布しているが分布図にはないもの、逆に分布図に兵庫にも自生するようになっているが兵庫では知られていないものがいくつも目についた。ヤナギについては2巻にオオバヤナギが兵庫県に分布することになっている。しかし、現在分布は確認されていない。

**史23** 福岡誠行・黒崎史平 神戸市北区帝釈山系の種子植物相「頌栄短期大学研究紀要22巻」1990: 六甲山の北に位置し、加古川の支流である山田川と武庫川の支流である有野川を挟んだ500~600mの山系で、東西15kmを調査対象としている。調査は全て標本採集により、その標本に基づいた目録を載せている。裸子植物9種、被子植物884種、種以下の下位単位18を挙げている。その中で注目したのは、サイコクキツネヤナギ (日当たりの良い山地や、岩場など県下に広く分布するが、分布地は稀である)、ヤマヤナギ (但馬の山地には多いが、南部では極稀) 以下略などである。

## おわりに

学校教育にはやや難解と思いつつ、縷々思いつくまま書き綴ったが、勇気ある教育実践と、効果あるヒトづくりのための先駆けになればと思う次第である。

## 参考文献

- 橋本光政『兵庫県の樹木誌』兵庫県 1995  
Christopher Newsholme『Willows The Genus Salix』timber Press; Portland, Oregon  
佐竹&原他『日本の野生植物: 木本 1』平凡社 1993  
北村&村田『原色日本植物図鑑: 木本編 1』保育者 1971  
佐島群巳『環境マインドを育てる環境教育』教育出版 1997

研究紀要 第109集

発行日／平成10年5月22日

編集発行／兵庫県立教育研修所

所長 辻 重五郎

兵庫県加東郡社町山国2006-107

電話 (0795) 42-3100(代)

印刷所／株式会社 邦 栄 堂